

9月27日(土)

## 巷談 ホタルの宿から

作 市珉亭十九

皆さんこんにちは。お初にお目にかかります。このわたくし、実は鈴鹿川の水で育った「ホタル」なんでございます。鈴鹿川というのはほんとにありがたい川でしてな。鈴鹿山系に吸い込まれた雨水雪水がたっぷり地下にしみこんで、伏流水になってるんです。お陰で水道水が地下からの汲み上げ水でまかなわれたり、下流の楠では昔から酒づくりが盛んなのは皆さんご承知のことと思います。

私たちがずーっと昔から住み着いてます楠町の一角も、その鈴鹿川の湧き水に恵まれたありがた〜い揺りかごみたいなところですよ。この「楠町」、実はこちらの町長さんと隣の市長さんが仲良うなって「市町村合併」がありまして、四日市市の一部ということになってしまいましたが、やっぱり「楠」は楠なんでございます。

地元の皆さんはわたしらを可愛がってくれてまして、何十年も前から「ほ ほ ホタル来い、あっちの水は苦いぞ・・・」と、ええ、あっちというのは北の方角なんですがね。夜通しやたら明るくて煙りモクモクの工場街。コンビナートいうんやそうですが、なにやら恐ろしくてとても飛んでいこうとは思いません。こっちの人たちは田んぼを大事にして、田植えに草取り、刈り入れ収穫と季節感が満ちあふれていて、きれいな水も途切れることなく、ホントにわたしらの暮らしにはぴったりの「いなか」でして、ひっそりですがなかよう、ホタル祭なんかもやってもらって過ごしてきたのでございます。

ところが、昨年でしたな、市長さんがわたくしらににじり寄っていらっしやいましてな、「わが町にはホタルが生息しております。空のきれいなヨッカイチ」と、あちこちに宣伝していただくようになりました。市役所の職員の名刺に載せていただいたり、なんと立派なポスターまで作っていただきました。静かに田んぼで暮らしていた田舎もんが、いきなりまちん中に放り出されたようなことで、気恥ずかしいやら照れくさいやら・・・・。そっとしておいてほしいのになあ、とまあこれが実感なんですけど・・・・。

いやいや、こんな失礼なことというとならあかんのですな。これを機会に「ホタルは大事せなあかん、もっとホタルが暮らせる場所を増やそう」なんていう人間様が増えてくださりや、ありがたいことですし。でも、この市長さん、12月でおやめになるそうで、わたしらホタルはどんな扱いを受けるのか、いささか心配なんですがね。

まあ前置きはこれくらいにしておきます。今日の本題は「よっかいち」のことなんです。わたしたちホタル一族は何年も前からここに住み継いできておるんですが、あっちのほうに見えるあの町がいつの間にやら空が曇ったり、海や川が濁ったりと評判の悪い町になってしまいました。まあ今は昔ほどではなくなりましたが、それでも自分とこのゴミを平気で捨てたりする工場が跡を絶ちません。何でこんな事になったんやら、わたしらが見てきたようすをちいっとばかり皆さんにお伝えしようかと思います。

### ●コンビナートのはじまり

わたしらの住む楠は今でこそ四日市市内ではありますが、石油化学コンビナートというも

のはございません。先にも言いましたが西のほうは田んぼや畑が多く、鈴鹿川を下っていきますと酒造りの大きな蔵が並んでいます。田中美奈子さんのCMで有名な「三重で生まれた世界の名酒……」なんていうのもありますな。それに今は規模も小そうになりましたが紡績工場がありまして、経済力もなかなかで四日市と合併なんかせんでもよろしかったんですが。

でもまあ距離的にくっついているわけですから、人の行き来は昔から多かったんです。だいたい磯津の漁港なんてのは楠の区域に入り込んでますしね、コンビナートの大きな原油タンクがいくつも楠には並んでおりまして、パイプでつながっているくらいです。それに「もらい公害」などとありがたいものまで頂戴してますから、中身はとおの昔から四日市みたいなものでしたな。

楠と境を接してくっついてるのが四日市の塩浜。そうそういうときですが「磯津」なんかも行政上の正式な地名は「塩浜」でございます。自治会は「磯津」を名乗ってますが、実に不思議なことでございます。が、その塩浜の、厳密には磯津以外の塩浜の海岸部には戦争中に海軍の燃料廠が並んでました。敗戦間際の昭和20年には、肝心の燃料は底をつくくらいでしたがアメリカ軍に狙われまして、散々爆弾落とされたもんです。それはそれはひどいものやったということで、わたしらの住む川のほとりは狙われることもなく無事でしたが、北の方の空は真っ赤に燃えておりました。

そんなむごい戦争もとにかく終わりました。そののち燃料廠の跡地はしばらく荒れたままで放置されていたんですが、「戦後の復興」というわけです。海軍ですから国の所有。ここを民間の工場に払い下げて景気を盛り上げようとしまして、なんやかんやと競争があったようですが、結局は昭和石油・「シェル」グループの手に渡ります。一番海岸べりの石原産業は最近、フェロシルだけでなしにホスゲンという猛毒ガス出したりとんでもないことがいっぱいばれてきましたが、戦前からここで農薬や肥料を作っておりました。もうほんとにここはどうしようもない会社です。この学校でもあとでじっくり責めてみたいと思います。

中部電力三重火力は戦後コンビナートともに新会社としてスタートしてます。これに石油化学工業を推進する三菱油化が加わりまして、パイプラインで結ばれた「塩浜石油化学コンビナート」がつけられました。払い下げの決定が昭和30年、その4年後にはほぼ全体が完成しまして、昭和34年4月に本格的に動き出し、後に「第1コンビナート」呼ばれることとなりました。

ついでにいうときですが、ちょうどこの年は4月に今の天皇が美智子さんと結婚し、9月には伊勢湾台風で三重県は大被害。たくさんの死者が出ました。安保闘争も激しさを増してきたりして、世の中大変な動きでございました。皆さんおいくつでしたかな。いや、失礼、その年にお生まれになった方でもう50歳なんですか。

話を戻しますが、出来た頃のコンビナートはそれはそれは立派なもんでした。何しろお国の政策でしたからな。名前からして今までにないわけですし、荒れ果てた跡地に大きな工場が建ち並んでいきます。「これからは石油の時代だ」「日本屈指のコンビナート」「四日市は豊かになります」「人もたくさん働けます」……。当時の新聞みてもいいことづくめで、完成後の光景は目を見張るものがありましたな。24時間操業で夜なんぞは昼間より目立つくらい明るい。「百万ドルの夜景」とはこういうたもんです。楠の片隅におる

わたしらもビックリ仰天でした。あそこにはいったいどんな生き物がおるんやろ、怖い物見たさに出かけようかというたりしましたが「いや、やめとこ やめとこ わしらが燃えてしもうたらかなわん」。

## ●「公害」のはじまり

けどまあ、世の中なんでもええことばかりやないんです。どうも工場の周辺でおかしなことが起きてきましたな。なにやら「コンコン」と咳き込む人が出てきたんです。年寄りや子どもはもちろんですが、体の頑丈な漁師さんまでもヒュウヒュウ喉が鳴り始めます。ぜんそくの氣（け）なんてないのにいったいどないしたんやろ。

そればかりやありません。伊勢湾で捕れる魚がおかしなってきました。ここの海は昔から魚の種類が豊富で鯛やカレイやガザミやらといっぱい捕れたんですが、何やら臭いがする。見た目は悪くないのに口に入れるとなっともならん。工場の出来る前はこんなことなかったなあ、折角捕れたのに市場で売り物にならん。

だんだんと問題がおおきなってきました、市役所の方もほおっておくことができません。磯津の空の空気調べましたらえらいことです。「亜硫酸ガス」がよその6倍もあるなんて結果が出ました。あっちで「ゴホゴホ」こっちで「ゼイゼイ」、もう大変な事態になってきて「四日市ぜんそく」なんて、ありがたくない名前までつけられてしまいました。しかし、これといって対策もとられませんし、原因を特定しようともしませんから一向によくなる気配がありません。でも、漁師さんはピンと来てました。

たしか、昭和38年でしたな。磯津の漁師さんが腹立てて「工場の排水が悪いに決まっとる、中部電力の排水口ふさいだれ！」と漁船に土嚢積んで押しかけます。警官隊まで出動して鈴鹿川の河口付近はえらい騒ぎです。血気盛んな漁師さんですから、あわや乱闘かと殺気立ってきます。一触即発とはこのことすな。しかし、そこへ割って入ったのが当時の塩浜地区の自治会長。「ちょっと待ってくれ。ここはおれの顔に免じて収めてくれ、悪いようにはせん」と、なんと土下座までして止めにかかる。自治会長の本音はどっち向いとったのかわかったもんやありませんが、そこまでされると男の世界。漁師さん、矛先降ろしてしまいます。でも、結局はカネ。はしたガネのような補償金で手打ちになってしまいましたな。自治会長さんいうのはえらいもんです。

こんだけ住民が苦しんだりしているのに、県や市は腰を上げようとしません。それどころか、もっと工場ふやそう、そのためには海を埋め立てよう、なんてことを平気で考えます。もともと四日市は水もきれいで「午起」「富田浜」と、文字通り「白砂青松」が続く海水浴場がありました。そこを、あろうことか埋めて潰して工場つくろうというわけです。昭和36年に午起海岸が埋め立てられてしまい、38年には大協石油グループを中心にした「第2コンビナート」が出来上がります。

いや、こればかりやありません。霞ヶ浦まで広げようとします。さすがにこの時は市議会でもめまして、反対派も頑張ったんですが結局推進派の「強行採決」に押し切られてしまいます。これは昭和42年のことですから裁判の始まった年です。山土運んで「出島」を作って「第3コンビナート」が完成したのが昭和47年、判決の年でした。もうこれですっかり四日市の海岸は埋め立てられて海水浴場がなくなってしまいました。富田浜

の一带には多少松並木が残っていますが、昔は国鉄（今はＪＲですが）の駅から海水浴客が列をなして歩いてましたし、遠浅のええ砂浜でしたんや。そら、あの有名な俳句の山口誓子さんがこの近くで療養がてら暮らしてみえたくらいですからな。でもこんなふうには海がなくなったんは四日市だけやなかったんです。「高度経済成長」期というたんですな。ともかく経済の発展が何より優先されたんです。「所得倍増論」なんてのも出てきます。大きなツケが目に見えてくるはもうすぐですけどな。四日市以外でも九州の水俣や新潟・富山とえらいことになっておりました。

それでも昭和４０年になって、四日市市は独自に審査会を作ってこれは「公害病です」と認定するんです。原因は何処ですとは言わないんですから不思議ですが、医療費は無料にしましょと大サービス。最初に認定されたのは１８人、そのうち１２人が磯津の住民ですから、コンビナートとの関係は素人目にもようわかるんです。そうこうしているうちに苦しみの揚げ句死んでしまう人が出てきます。最初は昭和３９年で６２歳の古川さん、肺気腫で亡くなりますが、４１年の木平さん４２年の大谷さんは自殺でした。なんとも辛い話です。片方でこの年に霞ヶ浦の埋立決定してるんですからこわいことです。

日本列島のあちこちで「公害」が広がってきますと、このままでは被害が広がるばっかいや「ほっといたらあかん」と立ち上げる人たちも出てきます。後になって「四大公害裁判」といわれるようになりますが、まず最初に新潟で裁判が起こされます。これは水俣と同じような被害ですが、本家より先に裁判となります。そんな全国の影響もあって名古屋を中心にした弁護士さん達が四日市に乗り込んできてくれました。「皆さんこのままでは苦しみが増すばかり、原因は工場の煙やというのをはっきりしてます。頑張って戦いましょう」とハッパをかけてくれました。

が、四日市だけやありません、だいたい三重県の人はおとなしい、遠慮がちと言うか引っ込み思案というか、お上に楯突くなんてのが苦手の人が多い。なかなか裁判の原告になる人が集まりませんが、なんとか９人が弁護団に支えられて裁判所に訴え出ました。それが昭和４２年の９月ですから、空のようすが変やといわれてから５年も６年も経ってます。原告というても被害者いわば病人で高齢の人もあり、自分らで何ができるというわけにもいきません。いちおう応援団もできまして署名やカンパ集めてくれたり、交替で裁判の傍聴にきてくれたりします。「公害訴訟を支持する会」というて学校の先生や市役所の職員なんかが多かったようですが。他にも政党が駆けつけたりマスコミも取り上げてたいそうにぎやかになってました。

## ●四日市公害裁判について

ここでちょっと裁判の整理しておきます。原告は磯津の住民９名。女のひとが二人です。年齢は３４歳から７７歳、平均４５歳。途中で二人の原告が亡くなって遺族が引き継ぎましたから、結審の時は１２人になっております。６人が漁業でいかにも磯津らしさ出ていますが、発作のひどい時は近くの県立病院に駆け込んでそこから仕事場の海に出かけるといふ、大変な生活でした。原告以外にも同じような症状の患者さんは何百人といます。犠牲者も２０人を越えました。裁判始めたすぐ後に中学生の女の子が亡くなってます。

対する被告は塩浜コンビナートの六つの会社。三菱グループの油化・化成・モンサント

化成（もっともこの三社はいまでは統合して三菱化学と名を変えてますが）、昭和四日市石油、石原産業それに中部電力三重火力発電所。これらはコンビナートとしてつながっているから共同して公害を発生させている。原告被害者達に多大の損害を与えたから責任を認めて賠償金を払えというわけですね。

つまり、原告達がぜん息など呼吸器の病気になったのは、工場から出る煙が原因だ、煙のもとを辿っていけば燃料の重油に行き着く。重油の中にはイオウがあるがあるからそれが燃えたら亜硫酸ガスという厄介な物になる。こんなガスが煙突からいっぱい出るとんやから、これが原因でぜん息になってしまった、ということになります。毎日工場の煙みて暮らしている住民にはようわかる理屈ですが、工場の中にいる人には理解できんのですな。いや、しようとせんのですな。あっちもいっぱい弁護士つれてきて頑張りますわ。責任認めたら会社やってけへんというわけですから、他の工場も応援団に加わって長い裁判になってしまいました。

間もなくして富山ではイタイイタイ病裁判が起こされますし、熊本では水俣病訴訟が昭和44年に出されて、これで四大裁判が同時進行で進められていくことになったんです。ようやく全国の被害者が手を結べたわけですから、公害反対運動も盛り上がっていきます。その頃の日本といえば公害だけではなしに、安保反対やら沖縄返還、狭山事件それに大学や高校でも学生が頑張っていて、渦巻いておりました。四日市は判決が出るまで5年かかっているわけですが、こんな全国の動きも大きな助けになりました。

結果はもう皆さんご存じの通り、原告である被害者の言い分が認められて全面勝利。責任は企業にあり、それも六社の「共同不法行為」として連帯責任を言いわたされたんですな。裁判長は米本さんというほんまに立派な方でした。それでも賠償金は総額で9千万円足らずのことでしたから、企業にしてみれば大した額ではなかったんでしょうな。ですから、まあカネというよりは責任の所在がはっきりしたこと、たとえ会社の利益が減っても上等の公害防止装置をつけなさい。だいたいこんな場所に工場作ったのは行政にも責任がある、と厳しく指摘してもらったこと、それがこの裁判のええところですよ。

そもう、応援団もみな喜びましたわな。あの日、昭和47年の7月24日。四日市の裁判所の前はひとだかりで溢れました。大きな演壇が組み立てられてどっとマスコミの皆さんが取り囲みます。バンザ〜イ、バンザ〜イの繰り返しでした。弁護団や学者先生の勝利の挨拶が続きます。ちょっと前に新潟の裁判でも原告が勝っていましたから、それはもう喜びも一入でしたでしたわな。ちょっと曇り加減の蒸し暑い日でしたけど、その日の夕刊はデカデカとその記事で埋められました。

けれども、何や知らんちょっと気になることもあったんです。裁判は勝ったんですが「工場の操業やめなさい」というとるわけやない。この日も工場の煙突からは相変わらず煙が出てます。いろんな挨拶の中で原告の一人、野田さんがこんなことをいうてくれました。

「裁判には勝ちましたが、公害がなくなるわけではありません。公害が無くなったときに、ありがとうの挨拶をさせていただきます。」と。

この時はみんな興奮してますから、えらい謙虚な人やなあというくらいにしか受け取ってなかったんですやろな。「公害が無くなった時・・・」なんて、想像なんかしてなかったのと違いますやろか。わたしらの住むホテルの宿まで騒ぎが聞こえて来るくらいでしたが、夜になって工場の空の明るいのはちっとも変わりませんでしたな。

それからしばらくは工場の責任者引っ張り出して、責任とれ一って、裁判には出てなかった人たちも結構なおカネを受け取ったようですが、勢いのあったのは一年くらいでしたかな、応援団もどこかへ引き上げて行ってしまいました。弁護士さんも学者さんも元の仕事場にお戻りになったようでした。

裁判のこと、かいつまんで言えばこれだけなんです、えらいあっさりしてるなって？

そうですね そらもうこれだけでも話し出したら1時間で終わるものではございませぬ。いろんなことがいっぱいありすぎてついつい端折ってしまいました。詳しいことはいろんな学者さんたちがまとめてくれてますので、あとで読んどいて下さい。まあ、裁判そのものは「法律」やら「科学」やらのやり取りでむつかしいて、専門家以外は退屈なもんやったらしいです。肝心なとこへくると企業は言い逃れします。よう野田さんが言うてみえますが「うちじゃない、うちじゃない」とのなすりつけあい。「空みたらいっぺんにわかるやろ」というのが患者さんの言い分でしたわ。そんなを長い時間かけて「審理する」のが裁判なんですね。

## ●「裁判」が終わってから

それで、裁判のあとどうなりましたか、まあ、その方が肝心なんですね。野田さんのいうてはった「公害の無くなった時……」というのは、いったいどうなったんでしょうな。

確かに、判決では被害者が勝ちました。企業は賠償金払いました。原告以外の公害患者も勢いをもろて企業を呼び出して「わしらも被害者や、責任とれ！」と、磯津の公民館は連日大騒ぎになりました。向こうも簡単にはOKしませんから、工場や東京までバス連れてやっつけに行きました。その結果、何億たらしいおカネが出てきました。

世間では「カネもうけしよった」なんて陰口叩く人間もおりますが、公害病と引き替えですからなんにも遠慮することはありません。でも、みんながみんなおカネだけで納得しとったわけではないんです。「やっぱり青空や」「ぜにもろても汚れた空気の下で暮らすのはいやや」「子どもらの将来はどうなるんや」と心配する人もたくさんいました。特におかあちゃんたちですね。この頃は認定患者の中で、中学生以下の子どもが磯津だけでも50人くらいおりましたから、すぐにでも空気きれいになってもらわんとあかん、工場の操業かて止めてもらわなあかと、むつかしういうと「差し止め」ですね。今度の裁判はカネだけやなしにそのこともきっちりせなあかん。

「磯津二次訴訟」ともいべきこの裁判。ええとこまで行きました。お母ちゃんたち公民館に集まって、弁護士も熱弁ふるって委任状も100以上集まりました。子どもを支えるために「磯津寺子屋」というのもできて、さあ一気に行こう。と、もうちょいでした。ところがどういうわけか、この話つぶれてしまいました。お母ちゃんたちが引っ込んだ訳やないんですが、何があったんですか。いまだに狐にだまされたみたい。いや、どこぞのタヌキがおったんやろうか。うわさでは「子どもが原告では勝てん」と弁護士が判断したとか、「会社とつるんだ悪党がおって裏で手廻したんや」とか、聞こえてきたりしますが真相がつかめません。なんとも妙な事になっていたんです。ここで追い打ちかけたら、判決が出てなくても「和解」なんかに持ち込めばどかっとカネとってそれを元手に大阪や水島みたいに「財団」つくって、公害資料館作ることもできましたやろ。二度と被害者の

でない環境作りに役立てることもできましたやろに、あの時そんな知恵の回る人もおらんのですかな。

訴訟といえば、もう一つあったんです。午起にある第2コンビナートに向かって、近隣の橋北地区の患者さん達が立ち上がっていたんです。橋北というのは三滝川の北で海蔵川まで。西は近鉄から東は海までの範囲をいいます。名四国道で排気ガスや騒音にも悩まされている地域ですが、ここがちょうど磯津と塩浜コンビナートのような関係になってるわけです。磯津の裁判に触発されたんでしょうな。自分らもなんとかしよう。わしらはカネやなしに「青空」さえもどつたらええんや。と、なかなか堅い結束ができました。

このコンビナートは塩浜より4年後の昭和38年から操業が始まっています。この年は磯津の漁師たちが中電の排水口塞いでしまえと「一揆」を起こした年です。しかも、あんまり空気が汚れてるから、と、東京から当時の厚生省や通産省の調査団が現地調査にもきています。こんな時に平気な顔してスタートしとるわけですから、無神経なもんですけど。この工場は大協石油が中心になってます。あ、今は丸善石油と合併してコスモ石油という名前になってますが、隣の協和油化と中部電力四日市火力発電所とつながってコンビナートを作っております。

もちろんここも午起の海岸を埋め立てて出来ているんですが、工場のすぐわきに市営住宅が並んでますし、名四国道の西には午起・高浜・東新町などという町があって軒を接して生活してましたが、このあたりにもコンビナートができてから、呼吸器をやられる患者さんがでてきました。位置関係は磯津と反対側ですが、工場との距離はむしろこっちの方が近いぐらいです。裁判で判決が出たといってもあれは第1コンビナート。こっちはこっちではっきりさせましょう、ということです。患者さんはおとしよりが多かったんですが、よう頑張りました。「市民兵の会」とかいうグループのメンバーが一生懸命後押しして、勉強会や会社への抗議行動やらやっていました。でもなかなか、「よっしゃ、まかしとけ」っていう弁護士さんが見つかりません。

そうこうしているうちに、企業の方もいろいろ知恵しぼっていたみたいです。「このまま患者のいうこときいとおったらきりがない。カネがなんぼあっても足りん。なんとか黙らす方法はないもんやろか」ということなんでしょうな。「あいつら青空や、きれいな空気やというてるが、結局はカネやろ。裁判なんかやられて「責任」認めさせられる前に、カネばらまいてしまえばおとなしなるに決まっとる。」とまあ、ぶっちゃけた話こんなところやったんでしょうな。うまいこと考えたものです。出てきたのが「四日市公害対策協力財団」。判決の次の年、昭和48年の9月に出来上がりました。

何か知らん、ややこしい話ですが、要するに企業がみんなしてカネ出し合って「財団」作り、そこに溜まった資金を患者にばらまきましょう。但しそれは責任認めた「賠償金」ではなしに「見舞金」のようなものですよ、というわけです。患者の会もいろいろありまして、訳のわからんカネはいらん、というったんですが、内部の意見もまちまちになって、うまいことまとまりません。結局は押し切られたような格好で「財団」が出来上がってしまいました。

それで、実際に患者一人一人に、それもランクつけておカネが配られだすと、もう文句言えんようになってしまいました。この頃は応援団の元締めやった「公害訴訟を支持する

会」も解散してしまいましたし、政党や労働組合の足並みも揃いません。同じ頃に国の方では「公害健康被害補償法」というのが出来上がりまして、4年後に財団は解散しこっちの方に引き継がれていきます。全く計算通りの進行やったわけですな。

裁判を中心にした四日市の公害反対運動は、正直なところここで終わってしもうたんですな。なんか後味の悪い、スッキリせん終わり方ですすな。『四大公害裁判』なんていうて歴史に名は残しましたが、ちっちゃな資料室一つではちょっと寂しいですわ。市長さんが弁護団のメンバーやったなんて信じられません。判決から今年で36年目ですけど、みなさんはどう思ってみえますことやら。

## ●頑張った住民運動

ああ、えらい情けない話ばかりしてすみませんな。せっかくの裁判・判決にケチつけたみたいで。でも、弁護士さんはもちろん、裁判起こすために駆け回ってくれた労働組合や政党のえらいさん、法廷で相手やっつけるために貴重な証言してもらった学者の方々、ほんまにご苦労さんでした。けど、あれから何年か経つ間にまるで信じられんような動きをされた政治家や学者さんもいるみたいで。いや、もうやめときましょ。誹謗中傷や名誉毀損やていうて叱られます。

それよりも、スッキリと「やっつけた話」も一つくらいはさせてもらいます。

被告六社のうちの一つに「三菱油化」という会社があります。今はグループ3社合わせて「三菱化学」になっていますが、塩浜街道沿いに四日市事業所の本体があり、名四国道の西に川尻分工場があります。その油化が裁判進行中の昭和46年の暮れのことです、鈴鹿川を隔てた河原田地区にエチレン生産工場を新たに増設すると発表したんです。なにしろ裁判に訴えられている身であるわけですから、被害者側からみたらとんでもないことです。計画に上げられた土地はほとんどが水田で、河原田地区の人たちが現実にコメ作りに励んでいるところです。

河原田というのは四日市市の南端で楠町とはくっついてます。わたしらホテル族もその辺りまで飛び回って楽しませてもらってる場所なんです。鈴鹿川と内部川に挟まれて西の丘陵地は河原田ミカンで有名ですし、昔からの農村地帯です。

油化のパンフレットにはこう書いてありました。

「最高かつ最善の公害防止技術を採用した最新鋭の工場を建設し、地域社会の生活をより一層改善すると同時に、地域社会の発展に寄与したい」

さらに「(この地域は)排水の便が非常に悪く農地としては先々あまりに大きな期待はもてない」などと、農業者の神経を逆なでするようなことも書いてましたな。

実は油化が発表する前から河原田地区の自治会長さんたちが、住民に詳しい説明もせんままに土地一括売却の同意書にハンコ捺させようとしたことがあって、みんな怪しいなと思ってた矢先やったわけです。住民は「このままでは先祖代々受け継いだ農地を取られてしまう。これ以上公害増やされたらかなわん」ということで反対に立ち上がりました。

もちろん公害裁判の応援団である組合や革新政党(懐かしい言葉ですな)も反対声明を出しましたが、簡単に会社は引き下がりません。それに当時の市長は九鬼さんです。大きな会社の出身ですし、増設には大賛成。しかし住民は頑張りましたな。勉強会を開きビラ



作ったり署名集めたり、なかなか個性的なキャラの持ち主も多くあの手この手で油化を追いつめていきました。その時に陰に隠れながら地域に入り込んで、住民を支え続けた連中がおりまして、結構お役に立てたらしいですな。名古屋からきた大学の先生、オッと失礼この人は学生に「自分のこと先生と呼ぶな」と言うのってらしいんですが、それに学生、労働者が力合わせて頑張っていました。「市民兵」なんて勇ましい名前でしたが、やってることはけっこう地味な活動でしたな。この時のことは、わたしらの中でも伝説のように語り継がれております。楠の人たちもよう頑張りましたよ。町長は反対でしたからな。

で、結論から言いますと、これは反対住民の勝ちでした。裁判した訳ではないんですが、四日市公害裁判でコンビナートが負け、反対派が東京本社へ押しかけたときに油化の黒川社長が「河原田計画は撤回します」と答えて、念書を書いたわけです。住民が企業の計画を追いかうという、これまでにない勝利となったわけです。

このことは、判決直後ということもあって支援団体の力やということになってますが、それは表だけのことで、ほんとには2年以上かけて頑張り抜いた地元住民の粘り強さがあったからこそですわ。それに陰になって支えてた市民兵サン、ようやってくれたと思ってます。まあ、どっちにしても鈴鹿川を越えてくることはなくなったのですが、油化にとっても結果的には却ってこの方がよかったんや、と皮肉いう人もおります。余分な設備投資せんと済んだわけで、それから後のコンビナートの不景気考えたら命拾いしたようなものですからなあ。

それと、後日談ですけど、この河原田の人たち、もう一つ偉い勝ち星がありますのんや。そや、あれは昭和54年のことですから、判決からもう7年も経ってました。コンビナートとは全然関係ないんですが、行政が推し進めようとした魚のアラの処理工場建設をストップしたという戦いがありました。もとはといえば四日市の三滝川沿いにあった工場なんですけど、ここから出る悪臭があまりにもひどかったんです。この工場、県内のスーパーや魚屋さんからでるアラを回収して処理し、肥料に換えて商品化したりしていたんですから、今はやりのリサイクルという点からは立派な仕事なんですけど、なんとも出て来る臭いが強烈でした。それでいろいろ経過はあるんですが省略してもらいます。ともかく行政はそこを潰してあらたに「化製工場」を作ろうとしたわけです。

その建設地として目をつけたのが河原田やったんです。今の名四国道沿いの公設市場がある場所です。ちょうど以前に別の用途を理由に四日市市が買い上げた農地が空いておりまして、そこへ悪臭で評判の悪い処理工場を持って来ようとしたわけですから、河原田の人たちが怒ったわけです。近くの楠の人たちも一緒になって、こんな悪臭工場がきたらとんでもない。「話が違う」と大反対運動となりました。勿論、三菱油化反対で大活躍した住民が中心になりました。かつての経験いかし当時の弁護士も呼んできて学習会に集会ビラ撒きと、あの手この手で頑張りました。

裁判にまで持ち込んだんですが、結局は推進する行政側の不備がばれてきまして、判決前に市が手を引き建設計画はつぶれてしまいました。住民側の大勝利となったわけです。なんと河原田二度目の勝利ということで歴史に名を残してくれました。お陰さんで楠に住むわたしらホテル族は気持ちよう飛び回れることが出来て、感謝感謝でございます。それと、これは噂で聞いたんですが、この処理場の建設に県の公害審査会の会長さんが「悪臭なんか心配ない」と、GOサイン出したんですが、それがどうもあの公害裁判の時の立

役者、Y教授やということですなあ。偉い人はいつまで経ってもエライもんですなあ。

## ●これからの「四日市」へ

ずいぶん長々しゃべってきましたんで、そろそろ終わりにしたいんですが、一番大事な患者さんのこと忘れるとこでした。認定制度そのものは昭和63年になくなってしまいましたがそれまでの認定患者さんが、取り消された訳ではありませんので今も約500人みえます。当時1,000人ほどでしたから半分以上亡くなったわけです。どんどん高齢化しています。みなさん薬飲んだり通院で大変のようですが、なかなか全体の患者さんのようすはつかみきれません。このあいだ磯津患者の会の代表、加藤さんが亡くなったそうです。82歳やったとかでご冥福を祈らしてもらいます。

裁判の原告さんは始まったときは9人でした。裁判途中に瀬尾宮子さんと今村善助さんがなくなり、瀬尾さんは夫と3人の子ども今村さんは息子さんが引き継ぎ結審の時は12人。その後多くの方が亡くなり今では野田さんともう一人の方が残って見えるだけです。野田さん70代後半になり薬の副作用もあって体調もままならず、漁師さんも続けられんようになりました。でも気持はお変わりなく澤井さんともども「語り部」として、あちこちの小学生や市民相手に頑張ってもらってます。亡くなった加藤さんの跡を継いで磯津患者の会の会長さんにもなってもらたようです。ありがたいことです。橋北の「青空運動」で頑張ってくれた皆さん、その後どうでしょうか。わたしらも楠からですとちょっと遠いのでご無沙汰してしまいました。こんなことではあかんのですが。

さ〜て、今の四日市どうなってるんでしょうな。大矢知の山に産業廃棄物がてんこ盛りで捨てられてました。もう何十年も前からやといいますから公害裁判の頃から始まってたんですな。それに被告やった石原産業は、田尻さんにとっつかまった廃硫酸のたれ流し事件でも、有罪の判決受けたのに、性懲りもなくフェロシルトやらホスゲンスやら物騒なもの作って世間をごまかしてました。それが愛知県や岐阜県でばれたわけで、わたしら三重県に住むもんはほんまに恥ずかしいことです。なんとか懲らしめなあきません

コンビナートのようすも随分変わったようすな。作ってる製品も昔はポリエチレンとかでわかりやすかったんですが、この頃は名前きいてもよくわかりません。それにプラントも古くなってサビだらけですし、事故もちょういちょい起きてます。地震がきたらどうなるんでしょうな。霞ヶ浦の方は議会で「強行採決」した割りに企業が集まらず、3分の1くらい空き地です。四日市市は大きな負担になってるんでしょうな。もっとも今は東芝サンのお陰で助かってるらしいですが。

四日市市は今年で「市制111周年」、盛大な事業が行われてます。この市民学校もその一つのような。まあ、私らもそのお陰でこんな檜舞台に上がらせてもらてありがたいやら照れくさいやらですが、111年前といいますと1897年、明治30年ですから日清戦争の頃ですわ。それからいっぱい戦争がありまして、塩浜に海軍の燃料廠ができたのが昭和16年、この辺が「四日市公害」の出発点になるのかも知れません。敗戦後に民間に払い下げられますがそれが石油化学の工場。当時としては大喜びで大歓迎でしたが「公害」というかたちで裏目に出てしまいました。となりの鈴鹿も「軍都」ということで海軍の飛行場や工場ができたんですが、あそこは戦後自動車や繊維工場を誘致して煙は出てま

せんし、海水浴場も残り対照的になりました。

こう考えてみると行政の力というものは大切なんですな。今風にいうたら「都市計画」  
いうんですか、よう先のことまで考えてやらんとあかんのでしょうか。そのためには市民  
も賢くならんとあかんということでしょうか。市長さんが交替ということになりそうで  
すがどんな「四日市」にしてくれるのか、皆さんの力しだいといううことになりますな。  
わたしらは、つつましく田舎で光ってるのがお似合いですから、ポスターはちょっとご遠  
慮申し上げたいんですが。それよりも何よりも水のきれいな空のきれいな四日市と胸張っ  
て言える日の来ることを願ってます。これはもう人間様に頼るしかありません。どうぞよ  
ろしくお願い致します。